

令和4年度 学力向上指導改善プラン

三田市立狭間中学校長 大杉 正昭

学校教育目標		人間尊重を基盤とし、確かな学力と豊かな心でたくましく生きる生徒の育成	
推進主体		管理職・主幹教諭(研究推進担当)・各教科代表で研究推進委員会を設置し、学力向上に向けた取り組みを推進する	
学力に関する前年度の状況・経年の課題等			
学力的状況	全国学力・学習状況調査結果の状況(国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む)	4月	
		成果となる目標 (指標となる数値等)	具体的な行動目標 (成果目標達成のための具体的な手立て等)
		2～3月	
		年度末評価	
		(今年度の成果と来年度に向けた課題等)	
		評価	
学力的状況	国語	○言葉や漢字に関する興味・関心を高め、語彙を増やすことで言語活動の充実を図る。 ○小説や詩などの文学作品の主題を理解するために、生徒同士の対話的な活動を取り入れる。 ○論理的な文章の構成を理解させ、具体例を示した論説文を書く力を育成する。 ○タブレット・ICT機器を活用したプレゼンテーション活動を高める。 ○学校図書館を活用し、読書習慣の定着を図る。	○古典と現代文を比較し、言葉の移り変わりを学ぶことで言葉に対する興味・関心を高める。 ○詩・短歌・俳句を創作させ、少人数のグループで互いの作品を鑑賞させる。そのような活動をおして主体的・対話的な深い学びへとつなげる。 ○プレゼンテーション活動やディベート等を行い、論理的な文章の構成と表現力を高める。 ○ブックトークやビブリオバトルを実施し、読書に対する興味・関心を高める。
	算数・数学	○ICTを活用したり、具体物を示したりして、体感的に物事をとらえる学習場面を設定する。 ○数学的用語を活用し、筋立てて考えを説明する表現活動を充実させる。 ○毎時間のねらいを明確に示し、振り返りを行う。 ○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組む。	○根拠を明確にしながら、筋道を立てて問題を考える活動の充実を図る。 ○グループ学習を通して、他の生徒の様々な考え方に触れながら、自分の考えを数学的に表現し、深い学びにつながるような授業を実施する。 ○日常的な課題を設定し、予想を立ててから測定したり、図示したりするなど、生徒自らが考えようとする時間をつくる。
	定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)	・テストへの意識は高く、定期考査前には家庭学習の時間を確保して勉強に取り組む生徒が多い。 ・効率的な家庭学習を行うために、テスト週間前には学習計画を立てさせる。 ・学力保障のための長期休暇中に学習相談を実施し、基礎学力の定着を図る。	○学校評価アンケートで「授業がわかりやすい」の数値を90%以上にする。 ○学習相談を充実させる。 ○5教科で毎日10分間のライオンズを活用した朝学習に取り組む、基礎基本の徹底を図る。
	授業等からうかがえる状況(各教科)	○安全で安心した学校生活が保障され、生徒の規範意識は高く、授業にも集中して取り組んでいる生徒が多い。 ○今後は、「めあてと振り返り」を明らかにすることで見直しをもって授業に取り組ませることや、「主体的・対話的で深い学び」等の授業形態をより浸透させる必要がある。	○校内研修を充実させ、授業力の向上に向けた研究に取り組む。 ○授業の「見直しと振り返り」や「主体的・対話的で深い学び」等の授業形態をより入れ込むこと、授業の改善に努める。 ○研究テーマを「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたICT活用」とし、全職員で研究に取り組む。
慣学・力向上に慣係等の学習状況	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況	・生徒は規律正しい生活を送り、課外活動にも意欲的に取り組んでいる。また将来の目標や夢をもち、それに向かって努力しようとする生徒の割合が高い。 ・今後は、「自己有用感を感じる機会と場の設定」や「話し合いによる学び合うスキル」を向上させることが課題である。	○学校評価アンケートで「命の大切さや思いやりの心など、豊かな心を育てようとしている」「はじめや努力のない安心した学校生活」の数値を90%以上にする。 ○自己有用感を感じるため、学級内での係活動や、委員会活動などを充実させる。 ○全教育活動などを通して、生徒同士が話し合う活動を活かし、学び合う力を向上させる。
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況	・生徒は楽しく充実した学校生活を送っていると言える。 ・生徒の個性を尊重し、生徒一人ひとりに活躍の機会や場を十分提供し切れていないので、その機会を確保する必要がある。 ・今後は、一層のわかりやすい授業づくりと基礎学力の定着に努める必要がある。	○学校評価アンケートで「教師は、生徒のことを良く理解し、適切・適切に指導している」「生徒の個性を大切に、一人ひとりに活躍の機会と場がある」の数値を90%以上にする。 ○ライオンズを活用し、個別学習を進めることで基礎学力の定着を一層図る。
校内研究状況・研修の	校内研究の状況	・「主体的・対話的で深い学び」を実現させるために、アクティブラーニングを取り入れた授業づくりを行うこととし、校内研究推進体制を整備している。 ・コロナの影響で、教科の研究授業が十分にできない状況があった。 ・1人1台端末の整備により、それを生かした授業づくりの研究を進めていく必要がある。	○協働学習の手法を取り入れ、学習者同士が対話的に学び合うことで学習内容の定着を図り、相手の意見をよく聴くとともに、自分の意見を伝える技術が高めることができる授業を実現していく。 ○全職員が昨年よりもICT機器を取り入れた
	校内研修の状況	・特別な支援が必要な生徒や精神面で不安を抱える生徒に対する支援方法を研修している。 ・ICT活用の技量を教員が高めるための研修を実施している。	○発達障害など特別に支援が必要な生徒向けの学習支援の在り方等の研修を行う。 ○教育相談や生徒理解のための研修を行う。
家庭・校種間連携	家庭・地域等の状況	・学校生活に适应できない生徒や対人関係に課題のある生徒の家庭と連絡を密にし、保護者、関係機関と連携して指導にあたっている。 ・今後は、地域の教育力を活用した取組を進める必要がある。 ・SNS等に係る諸問題を家庭と連携して解決に当たる必要がある。 ・ネットマナーについて予防的、開発的指導を継続させていく必要がある。生徒自身の自己指導能力の育成が今後の課題である。	○不登校生徒や相談室生徒の割合を昨年度より低くする。 ○SNS等に係る生徒指導事例の割合を昨年度より低くする。
	小・中における教科連携等の状況	・小中が連携し、学びの連続性を重視した教育を行う必要がある。 ・小中が連携して、個々の生徒への実態把握に努め、時にはケース会議を持ちながら具体的な対応や生徒指導を行っている。	○学期に1回の連絡会と、小学6年生への出前授業を実施する。 ○個々の児童生徒の学力や課題を具体的に把握することで、小学校から中学校への接続が円滑にいくようにする。